

## 2 つの手 — 見えざる手と見える手 —

縄 田 榮次郎

### 1. 事前と事後

＜見えざる手＞とは市場である。

資本主義体制とはマーケット・メカニズムを媒介とする経済組織であり、プライス・メカニズムによる自由競争的需給調整と、利潤原理にもとづく効率的生産を前提とする個別主体的消費選好システムである。経済機構は社会にとって手段であり、生産効率と消費者主権は自由社会における基礎的フレームワークである。

手段における効率性は成長の必須条件であり、政策体系の中心的課題は市場効率の永続的保持である。競争原理の維持と独占規制のチェックを通じ、＜見えざる手＞は常に＜見える手＞による監視と統制を受け、国家機能としての強制権力執行を介して、手段としての経済は目的としての社会に帰属する。

資本主義体制は＜見えざる手＞を手段とする＜見える手＞による政治経済体制である。

＜見える手＞とは計画である。

社会主義体制とは国家機構を媒介とする経済組織であり、資源国有化による一元的独占体制と中央集権的計画原理にもとづく生産・消費の事前的一致を原則とする資源配分システムである。事後的一致の条件は＜ノルマ＞の実現であ

り、上意下達の権力的システム・プリンスプルは、景気循環と失業回避の体制的メリットとともに、ビュロクラシー（官僚組織）における非能率と消費者選択における禁欲を強制する。〈見える手〉の社会主義体制は計画生産に適合する従属的消費選好システムである。

計画は手段であり、社会的目的は国家権力機構を通じて計画的に実現される。アナーキーとも思える〈見えざる手〉の自然秩序は〈見える手〉の国家秩序によって理性化され、〈見えざる手〉の需給原理は計画原理に内在化される。中央集権的計画経済とは封建的・独占的配分原理にもとづく強制的執行体制である。

社会主義体制は〈見える手〉を手段とし、〈見えざる手〉の止揚<sup>しょう</sup>を目的とする政治経済体制である。

## 2. 予定論と理神論

〈見えざる手〉は摂理を配剤とする予定論（プレデスティネーション）であり、〈見える手〉は悟性を典拠とする理神論（ディーイズム）である。

〈見えざる手〉を放任するとき、競争は必然的に独占を醸成し、その不完全競争は予想もされなかった独占的調和を実現する。経済外的統治機構による反独占と競争促進の制度的・政策的修正によって、古典的・自由主義的資本主義経済の現実には、権力機構を配剤とする〈国家独占資本主義〉の支配体制を結果する。〈見えざる手〉が依拠する摂理の結実は〈安い政府〉に代わる〈高い政府〉であり、そのビッグ・ガヴァメントの中核を構成するものは、最先端テクノロジーとワールド・エンタープライズに依拠する権力的市場支配機構としての〈産軍複合体〉の出現である。

〈見えざる手〉に内在する予定調和的需給調整の論理的洞察と、その帰結が露呈する体制的欠陥の排除を志向する〈見える手〉による悟性的計画の適用は、

効率と秩序に関する経済計算論的アポリアを内包しながらも、現代世界における先進支配国家が必要とする最先端アーマメントの充足を完成した。

＜資本主義の一般的危機＞といわれたグレート・デプレッション（大恐慌）の30年代において、体制的矛盾としての失業の内包と顕在に無縁な計画経済は、知性にとって憧憬の対象であった。それは＜見える手＞による＜見えざる手＞の支配であり、理性による自然の支配であった。しかし、文明進歩の象徴とも思える中央集権的計画体制の実態は、配分原理に関するパーフェクトな独占的市場システムの現実であり、パフォーマンスとして実現されたものは、国家独占社会主義体制にもとづく完全機構としてのテクノシステムティックなく産軍複合体＞である。

### 3. 手段と目的

＜見える手＞も＜見えざる手＞も、理論と実証にもとづく数理的・統計的シミュレーションの精緻化と計画化を進めていく。＜見えざる手＞はますます統計化され、＜見える手＞はますます精緻化される。ハイ・テク社会と情報社会の条件下にあって、産軍複合体制は何を解決すべき課題とするのであろうか？

国境線の維持と拡大という古典的国家概念の論理か？ リベルテ（自由）とエガリテ（平等）に関する資本主義対社会主義にまつわるイデオロギッシュな古典的体制論の宣布か？

国家は本質的に戦争国家である。負け犬が闘犬でないごとく、地縁・血縁にもとづく人間は本質的に闘争する存在であり、生活手段と人間を結合する媒体としての国家体制は、必然的に闘争の手段と化す。問題は、闘争手段としての国家が目的と化し、目的の喪失が予想される事態である。

現代国家が産軍複合体を構成するかぎり、その中核は、科学技術としての最先端テクノロジーのシステム化である。それは、国家目標のプライオリティー

## 2つの手

を規定する決定条件であるとともに、資源配分計画における至上条件となる。国家構造・経済構造・産業構造、これらすべてのシステムは、国家目的にしたがって体制化される。目的はテクノロジーのイノベーションであり、科学のプログレスである。＜理性＞による文明の進歩は、国家を手段と化し、人間をも手段と化す。目的の喪失と手段の目的化である。

かく核文明が実証する人間消滅の可能性に遭遇して、人間はどのような目的を模索するのか？

文明の進歩が非可逆的であるとき、人間は、傀儡<sup>かいらい</sup>的主体性に仮装された＜文明要素＞としての実体を、自らの結末として露呈するのであろうか？

## 4. 注 解

### (1) 2つの手に関する1つの解釈

- a <見えざる手>も<見える手>も産軍複合体の原理である。
- b <見えざる手>の支柱は国家のポリシーであり、<見える手>のトレーガーは個人のノルマである。
- c <見えざる手>の前提条件は個人に隠された国家信仰であり、<見える手>の前提条件は国家に隠された個的イデオロギーである。
- d 自由放任的予定論は国家的強制に依存し、中央集権的理神論は個人的自主性に依存する。
- e 資本主義体制は国家主義であり、共産主義体制は個人主義である。

### (2) アポリアとしてのブラッド・ヒューマニズム

- a 事前的無計画の摂理にもとづく事後的計画成果の現出は、<見えざる手>による<見える手>の実現であり、個人的良心にもとづく無政府的なブ

ロテスタンティズム（自由信仰）が、＜見えざる手＞に導かれて社会的隣人愛となる。

- b 事前的計画の予定にもとづく事後的責任成果の現出は、＜見える手＞による＜見えざる手＞の実現であり、カソリシズムにもとづく全体主義的な画一が、＜見える手＞に導かれて個人的篤信を確立する。
- c ＜見えざる手＞の競争原理と個人主体は、利己心に規定されたエゴイスティックな効率を実現し、＜見える手＞の計画原則と国家主体は、強制力の執行によるソシアリスティックな分配を実現する。
- d ＜見えざる手＞の競争原理は独占体制を結果することによって＜財閥＞を醸成し、＜見える手＞の計画原理は官僚体制を結果することによって＜ノーマンクラトゥーラ＞を醸成する。
- e マテリアリズム（唯物論）としての双児の体制が内包する共通のアポリアは、理性のメカニズムにおいてブラッド・ヒューマニズム（血縁紐帯）の情念が演ずる非合理的集団行動である。

### (3) 怨恨と神と憐憫

- a ＜見えざる手＞も＜見える手＞も唯物主義であり、その原理はユダヤ・キリスト教に依拠する生産力（生産性）摂理である。
- b それは怨恨と神と憐憫によって構成され、その実体は、有産富裕層と生産力（生産性）と無産貧困層であり、そのそれぞれの規定条件は＜支配と搾取＞・＜永遠と効率＞・＜隷従と貧窮＞である。
- c 支配と搾取は正義に悖り、打倒されねばならない怨恨の対象であるとともに、永遠と効率は生産力（生産性）のア・プリオリな必然性の体现であり、歴史的発展にもとづく社会の変革は神の摂理である。それゆえ、隷従と貧窮は救済に値し、主体として樹立されねばならないヒューマニ

## 2つの手

スティックな憐憫の対象である。

- d 怨恨を生む支配と搾取の終末は神の審判であり、それは、隷従と貧窮を排除された生産力（生産性）主体の復活である。
- e 生産力（生産性）摂理にもとづく経済思想（理論）は、人間が置かれた実存の反映であり、自己の卑小（自由）への憐憫と社会の強大（強制）への怨恨を、生産力（生産性）という永遠なる神の裁きに托した理性と論理のミザントロップな人間告発である。